



被災者と触れ合い

津波で全壊した旧大槌町役場前。町の臨時職員だった婚約者をここで亡くした臼沢和行さん(29)は、観光バスから降りてきた大学生たちに語り掛ける。「彼女に『愛している』と言えなかった後悔がある。皆さんに伝えたいことは一つ。大切な人に『愛している』と言えるときに言って」。臼沢さんが代表理事を務める「一般社団法人おらが大槌夢広場」の復興ツーリズム事業の一幕だ。同事業では町をフィールドに、参加対象者に合わせて被災者

3.11
東日本大震災から3年



旧大槌役場前で学生たちを前に語る臼沢さん(中央)

体験語り継ぎ人を育てる

と直接触れ合うプログラム 目的だけではなく企業研修が組まれる。その中で、訪としても注目され、大企業の人材は生きる意味や働くのリーダーも多い。意味、人との関わり方など、訪れた日は、震災の風化それぞれに大切な何かを感じ取っていく。学生の教育 47都道府県の学生が東北3

県をバスで巡る「きつかけバス47」プロジェクトの一環として、岩手県などの大企業38人が参加していた。学生たちは旧役場前で臼沢さんから被災当時の状況な

る。結局いつかは昔話になってしまうかもしれないけれど、私は体験を語るために生かされたと思って語り続ける」と力を込めた。臼沢さんは、復興ツーリ

つて何もできていない。思いは何か尋ねた。臼沢さんは「一生懸命生きること。他人事も自分事として動くこと。チャレンジ精神」と答え、「大槌に多くの人を呼び込みたいというのは彼女の夢だった。今は私が彼女の夢を追いかけたい」とほほ笑んだ。

おらが大槌夢広場では、震災後間もない頃から復興のステージに合わせて、まちづくりに関するさまざまな事業を手掛けてきた。現在は復興ツーリズムの他、地元高校生を対象とした育成事業などを展開する。一貫しているのは「人を育て

どを聞いた後、仮設団地内にある仮設商店街に移動。6、7人のグループに分かれ、語り部を務める商店主たちの話を傾けた。

風化にあらがう

雑貨店を営む越田征男さん(68)は、津波で流された元の店舗跡に学生を案内。店の近くにあった小高い石碑に上って間一髪難を逃れた体験や、目の前で住民が流されていった様子などを克明に語った。そして「この先、町の姿が変わっていくと、どんなに話をしても外から来た人は当時の様子を肌で感じられなくな



海の方角を指し示しながら震災当時の様子を語る越田さん(右)

婚約者の夢追う
学生たちを見送った後、臼沢さん自身が忘れたくなく育っていることが大切」と。(丹羽恭太)

勝毎 電子版
(この連載は電子版で全編ご覧になれます)